

ドマリ語エルサレム方言の 一致標示とその通時的発展*

日本学術振興会特別研究員 DC1 東京大学・人文社会系研究科

博士課程一年 北村萌

kitamuramoe0506@gmail.com

キーワード: ドマリ語 インド・ヨーロッパ語族 インド・アーリア語群

記述言語学 一致標示

要旨

本研究では、ドマリ語エルサレム方言における動詞の一致標示のパターンを明示し、どのような歴史的背景によって複雑な一致体系が成立したのかという問いを立てる。この問いを明らかにするため、インド・アーリア語群とイラン語群について、一致標示に生じた歴史的变化を説明し、ドマリ語がどのような変化を共有しているのか考察し、変則的な一致が生じた背景を説明する。結論として、以下のことを主張する。ドマリ語は Middle Indo-Aryan 期 (600BC–1000AD) にインド・アーリア語群において過去分詞の受動構文が過去時制動詞として用いられ始めるまではインド・アーリア語圏に居住していたことと、New Iranian 期 (7c.AD–) には西イラン諸語が話されている地域に移住し、借用により、人称代名詞接辞の複数形の形式や、動作主標示に被動者標示を連ねる構造を受け容れた。その後、ドマリ語の完了相の動詞において、Middle Indo-Aryan 期の能格型の一致体系から対格型への変化が生じ、その過渡期において二重斜格型アラインメントが生じた。また、完了相の他動詞において動作主が3人称単数、被動者が3人称単数あるいは3人称複数で、明示的な被動者名詞句が存在しない場合に生じる変則的な一致標示は、単子音化や重音脱落が生じ得る環境であったという音韻的な側面に加え、アラビア語をモデルとした pattern replication が生じたことにより成立した。

1. 導入

本研究は、ドマリ語エルサレム方言における動詞の一致標示のパターンを明示し、そこに見られる複雑な一致体系がどのような歴史的背景によって成立したのかという問いを明

* 本研究は 2023 年度日本学術振興会特別研究員奨励費の助成を受けたものである。

らかにすることを目的とする。この問いを明らかにするため、筆者がエルサレムにおいて 2019–2020 年に行った調査や、2019 年にアンマンにおいて行った調査に基づき、ドマリ語エルサレム方言の一致標示に見られる一致標示のパターンを記述した後、完了相の動詞の動作主が 3 人称単数、被動者が 3 人称単数あるいは 3 人称複数で、明示的な被動者名詞句が存在しない場合に生じる変則的な一致標示について、音韻面と、言語接触の側面から考察を行う。

結論として、以下のことを主張する。ドマリ語は Middle Indo-Aryan 期 (600BC–1000AD) にインド・アーリア語群において過去分詞の受動構文が過去時制動詞として用いられ始めるまではインド・アーリア語圏に居住していた。New Iranian 期 (7c.AD–) には西イラン諸語が話されていた地域に移住しており、人称代名詞接辞の借用に伴い、動作主標示に被動者標示を連ねる構造も受け容れた。また、完了相の他動詞において動作主が 3 人称単数、被動者が 3 人称単数あるいは 3 人称複数で、明示的な被動者名詞句が存在しない場合に生じる変則的な一致標示は、語中音消失が生じやすい環境であったという音韻的な側面に加え、アラビア語をモデルにした *pattern replication* が生じたことによって成立した。

第 2 節においてドマリ語や、インド・アーリア語群、イラン語群の歴史的背景について説明し、第 3 節において、ドマリ語エルサレム方言の一致標示のパターンについて説明する。その後、第 4 節においてインド・アーリア語群とイラン語群について、一致標示のアラインメントにどのような歴史的変化が生じたのかをそれぞれ述べ、ドマリ語の形式的な二重斜格型の一致標示がどのように成立したかを考察する。また、第 5 節において完了相の他動詞において動作主が 3 人称単数、被動者が 3 人称単数あるいは 3 人称複数で、明示的な被動者名詞句が存在しない場合に生じる変則的な一致標示について、音韻的な側面に加え、言語接触の側面からも考察し、第 6 節で結論を述べる。

2. 背景

2. 1. ドマリ語とは

ドマリ語はインド・ヨーロッパ語族インド・イラン語派インド・アーリア語群に属する言語で、話者は中東を中心に散住しているドム人であり、そのほとんどがアラビア語とのバイリンガルである。シリア、レバノンなどの北部方言と、パレスチナ、ヨルダンなどの南部方言に分けられる。本稿では、南部方言のうち、エルサレム方言を対象とする。ドマリ語は厳しい消滅危機状態にあり (EGIDS 6b-9)、エルサレム方言はその中でも特に危機

的な状況にある。本稿の例文には、エルサレム生まれエルサレム育ち 67 歳の男性 KS 氏から 2019 年 1 月–2020 年 5 月にアラビア語を介して得た調査結果と、エルサレム生まれで、1967 年の第三次中東戦争以降アンマンに移住した話者から 2019 年 12 月にアラビア語を介して得た調査結果を用いる。

2. 2. インド・アーリア語とドマリ語の歴史言語学的背景

ドマリ語は、系統的にインド・アーリア語群に属しているため、本項では、インド・アーリア語群とドマリ語の歴史的背景について説明する。

インド・アーリア語の歴史は古期 (Old Indo-Aryan, 1500BC–600BC)、中期 (Middle Indo-Aryan, 600BC–1000AD)、新期 (New Indo-Aryan, 1000AD–現代) の三つのステージに分けられる。Turner (1926) に基づき、音変化から推定されるドマリ語の歴史的背景は以下のようなものである。

1. Old Indo-Aryan から Middle Indo-Aryan 頃までに生じた音韻変化については、ラージャスターニー語、ヒンディー語、中央、東パハーリー語、ビハール諸語などの中央語群と以下の改新を共有しているため、この時期にはインド中原に暮らしていたと推定される。

$\tilde{r} > i, u$; $y- > \text{ç-}$; $k\text{ṣ} > k(h)$; $sm > mh$; $tv, dv, tm > pp$;

$-m- > -\tilde{v}-/V_V$

2. Middle Indo-Aryan から New Indo-Aryan の間に生じた音韻変化に関してはスィンディー語、ラフンダー語、カシミリー語、パンジャービー語などの北西語群と以下の改新を共有しているため、この時期にはインド亜大陸北西部に移動していたと推定される。

$\tilde{n}c > n\text{ç}$; $n\text{ṭ}(h), nt > nd$; r の音位転換

3. その後さらに北西に進み、イラン語群の言語が話されている地域を経て、中東に移動した。

2. 3. イラン語群の歴史言語学的背景

前項で述べたように、ドマリ語はインド亜大陸北西部を出た後、イラン語群の言語と接触したと考えられるため、本項では、イラン語群の歴史的背景について説明する。

イラン語群の言語の系統関係は、祖イラン語から東イラン諸語と西イラン諸語に大きく

分岐し、それぞれが北と南の二つの下位分類を持つという分析が主流である。また、イラン語群は大きく Old Iranian (紀元前 14–6 世紀頃の Avestan や、紀元前 6–4 世紀の Old Persian, OIr.)、Middle Iranian (紀元前 3 世紀頃–, MIr.)、New Iranian (7C 頃–, NIr.) の三つの歴史的なステージに分けられる。この伝統的な見方を表す樹形図は以下の図 1 のようになっている (Korn 2016: 403)。

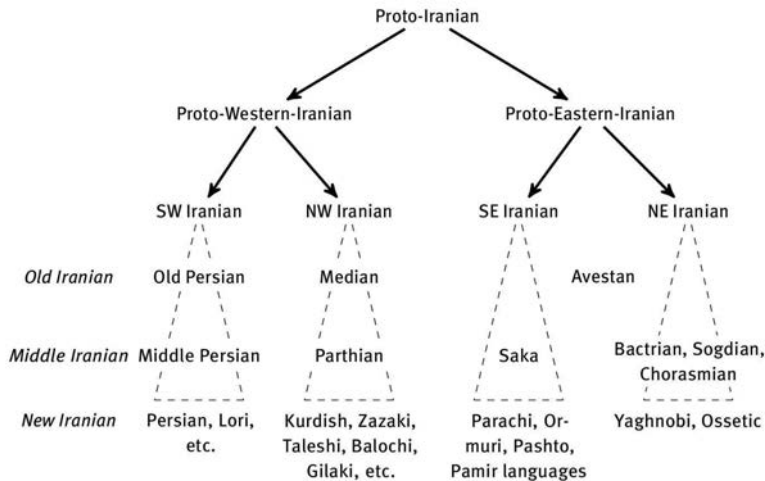


図1: Iranian languages tree (Korn 2016: 403)

3. ドマリ語エルサレム方言における動詞の一致標示のパターン

本節では、ドマリ語エルサレム方言における動詞の一致標示のパターンについて説明する。ドマリ語エルサレム方言の動詞は、ほとんどの場合、自動詞の唯一項あるいは他動詞の動作主と義務的に一致するが、限られた条件下で変則的な一致標示を見せる。

表 1 はドマリ語エルサレム方言の一致標識である。ドマリ語は、完了相と未完了相で用いる一致標識のセットが異なっている。さらに、完了相の動詞は、三つのタイプに分けられる。これらの一致標識の起源については、詳しくは北村 (2022) を参照されたい。本稿の考察に必要な点をまとめると、以下のようになる。

1. 未完了相の一致標識のセット agreement marker 型 (agr. 型) は、サンスクリットなどの Old Indo-Aryan の直説法現在能動動詞の一致標識に起源を持つ可能性が高い形式を持ち、未完了相の動詞で常に用いられる。
2. 完了相の一致標識のうち adjective 型 (adj. 型) は、3SG、3PL との一致標示におい

て見られ、名詞/形容詞と同じ、性と数による一致体系と形式を持つ。

- cf. e:r-a ‘He came’ kaɕ-a ‘non-Dom man’
 e:r-i ‘She came’ kaɕɕ-i ‘non-Dom woman’
 e:r-e ‘They came’ kaɕ-e ‘non-Dom men/women’

自動詞や、明示的な被動者名詞句が存在する場合の他動詞に用いられる。

3. 完了相の一致標識のうち pronominal suffix 型 (pron. 型) は、1SG、2SG、3SG との一致標示において見られ、斜格の人称代名詞接辞に由来することが推察される形式を持つ。

- cf. kar-d-om ‘I did’ da:j-om ‘my mother’
 kar-d-or ‘You did’ da:j-or ‘your mother’
 fer-d-os-im ‘He hit me’ da:j-os ‘his mother’

1SG、2SG の一致標識は完了相の動詞全てにおいて、3SG の一致標識は、完了相で、明示的な被動者名詞句が存在しない場合の他動詞に用いられる。閉音節においては短母音が、開音節においては長母音が見られる。

4. 完了相の一致標識のうち adjective + agreement marker 型は、1PL、2PL、3PL との一致標示において見られ、名詞/形容詞に接続して複数を表す接辞 -e に 1PL、2PL、3PL の未完了 agreement marker 型の一致標識をそれぞれ接続させて成立したと考えられる形式を持つ。

- cf. 1PL -e + -an → -e:n
 2PL -e + -as → -e:s
 3PL -e + -and → *-e:nd¹ > -ed

1PL、2PL の adjective + agreement marker 型の一致標識は完了相の動詞全てにおいて、3PL の adjective + agreement marker 型の一致標識は、完了相で、明示的な被動者名詞句が存在しない場合の他動詞に用いられる。

他動詞節に明示的な被動者名詞句が存在しない場合、他動詞は動作主の一致標識の後に、人称代名詞接辞によって義務的に被動者を標示する。この人称代名詞接辞は表 2 のようである。

まず、未完了相の動詞における一致標示のパターンを説明する。未完了相においては、常に自動詞の唯一項あるいは他動詞の動作主が agreement marker 型の一致標識によって

¹ ドマリ語北部方言では -e:nd の形式が見られる (Herin 2012, 2014)

表1: ドマリ語エルサレム方言 一致標識

	未完了	完了	
	agr. 型	adj. 型	pron. 型 adj. + agr. 型
1SG	-am		-om/o:m
2SG	-e:k		-or/o:r
3SG	-ar	-a (M)/-i (F)	-os/o:s
1PL	-an		-e:n
2PL	-as		-e:s
3PL	-ad/-and	-e	-ed

表2: 斜格人称代名詞接辞

1SG	-(o/i/e)m
2SG	-(o/i/e)r
3SG	-(o/i/e)s
1PL	-man
2PL	-ran
3PL	-san

標示される。

次の例文は、未完了の動詞の例である。(1) a. は自動詞文、b. は明示的な目的語名詞句を持つ他動詞文、c. は明示的な被動者名詞句を持たず、目的語標示に人称代名詞接辞が用いられている他動詞文の例である。

- (1) a. ama kamk-**am**-i.
 I work-**1SG**-PRS
 ‘I work.’
- b. qol-**ar**-i ka:by-a.
 open-**3SG**-PRS door-OBL
 ‘(S)he opens the door.’

- c. lah-**am**-r-i kull di:s.
 see-**1SG**-2SG.OBL-PRS every day
 ‘I see you every day.’
- d. fa:m-**ar**-s-i.
 hit-**3SG**-3SG.OBL-PRS
 ‘(S)he hits him/her.’

以上のように、未完了相の動詞においては、主語 (自動詞の唯一項と他動詞の動作主) との agreement marker 型の一致標示が見られ、いずれにおいても動詞は主語と義務的に一致する。

次に、完了相の動詞における一致標示のパターンを説明する。完了相の動詞は表 3 の条件に従って pronominal suffix 型 (pron. 型)、adjective + agreement marker 型 (adj. + agr. 型)、adjective 型 (adj. 型) の一致標識を使い分ける。

表3: 完了相の動詞の一致標識の分布

自動詞	他動詞 (被動者 NP 有り)	他動詞 (被動者 NP 無し)
1SG		pron. 型
2SG		pron. 型
3SG	adj. 型	pron. 型
1PL		adj. + agr. 型
2PL		adj. + agr. 型
3PL	adj. 型	adj. + agr. 型

完了相の動詞において、1SG、2SG が主語の場合、自動詞であるか他動詞であるかや、明示的な被動者名詞句の有無に関わらず、常に pronominal suffix 型の一致標識によってこれらが標示される。

次の例文は、1SG、2SG が主語である完了の動詞の例である。(2) a. は明示的な目的語名詞句が存在する他動詞文、b. と c. は明示的な目的語名詞句が存在せず目的語が人称代名詞接辞によって標示される他動詞文である。

- (2) a. nan-d-**om** samak-i aḡoti.
 bring-PRF-**1SG** fish-OBL today
 ‘I brought fish today.’

- b. lah-d-**o:m**-ir xoɕoti.
 see-PRF-**1SG**-2SG.OBL yesterday
 ‘I saw you yesterday.’
- c. nan-d-**o:r**-is.
 bring-PRF-**2SG**-3SG.OBL
 ‘You brought it.’

また、完了相の動詞において 1PL、2PL が主語の場合は、自動詞であるか他動詞であるかや、明示的な被動者名詞句の有無に関わらず、常に adjective + agreement marker 型の一致標識によってこれらが標示される。

次の例文は、1PL、2PL が主語である完了の動詞の例である。(3) a. は自動詞文、b. は明示的な目的語名詞句が存在する他動詞文、c. は明示的な目的語名詞句が存在せず目的語が人称代名詞接辞によって標示される他動詞文である。

- (3) a. itme qeɾ-r-**e:s**.
 You.PL eat-PRF-**2PL**
 ‘You ate.’
- b. ʃallim-r-**e:n** do:m.
 learn-PRF-**1PL** Domari
 ‘We learned Domari.’
- c. feɾ-r-**e:n**-san.
 hit-PRF-**1PL**-3PL.OBL
 ‘We hit them.’

しかし、完了相の動詞において、3SG と 3PL が主語である場合の一致標示には、明示的な被動者名詞句の有無によって異なる一致標識が用いられる。まず、3SG について説明する。3SG では、完了の自動詞の唯一項や、他動詞が明示的な被動者名詞句を持つ場合の動作主の標示には adjective 型の -a/-i、完了の他動詞節に明示的な被動者名詞句が無い場合の動作主の標示には、pronominal suffix 型の -os/o:s が用いられる。

以下の例文は 3SG が主語である完了の動詞の文である。(4) a. と b. は明示的な被動者名詞句を持つ完了の動詞の例であり、c. は、明示的な被動者名詞句を持たず、被動者を人称代名詞接辞によって標示している完了の動詞の例である。

- (4) a. kar-d-**a** mansaf.
 make-PRF-**3SG.M** mansaf

‘He made mansaf (traditional Arab dish).’

b. tir-d-**i** sa:l ama-ke.

put-PRF-**3SG.F** rice I-BEN

‘She served me rice.’

c. ʕan-d-**o:s**-im?

know-PRF-**3SG-1SG.OBL**

‘Did (s)he know me?’

ここで、例文 (2) b. c. のように 1SG あるいは 2SG が動作主である他動詞や、(4) c. のように、3SG が動作主である他動詞において、明示的な被動者が存在せず、被動者が人称代名詞接辞で標示される場合、動作主も被動者も斜格人称代名詞接辞に由来する形式で一致標示されており、形式的には二重斜格型のアラインメントを取っているように見える。ただし、動作主の標示が無条件で義務的であるのに対し、被動者の標示は、明示的な被動者名詞句が存在しない場合のみ必須となるという条件があり、義務性が低い。この一致標示パターンの成立については、第 4 節において考察する。

完了相の動詞における 3PL 主語との一致標示については、自動詞の唯一項や、明示的な被動者名詞句を持つ場合の他動詞の動作主は adjective 型の -e、被動者を人称代名詞接辞で標示する場合の他動詞の動作主は adjective + agreement marker 型の -ed が用いられる。

以下の例文は、(5) a. が完了の自動詞の場合、b. が完了の他動詞が被動者を人称代名詞接辞で標示する場合の例である²。

(5) a. kamk-id-e baladi:ye:-ma.

work-PRF-**3PL** city hall-LOC

‘They worked in the city hall.’

b. lah-d-**ed**-im.

see-PRF-**3PL-1SG.OBL**

‘They saw me.’

以上のように、ドマリ語エルサレム方言の完了相の動詞の一致標示は、用いられる一致標識に一部分裂が見られるものの、ほとんどの場合において自動詞の唯一項あるいは他動詞の動作主によって義務的に一致が引き起こされる。

² (5) a. の -id- は、完了相 -d- の異形態で、語幹末が破裂音である場合に生じる。

しかし、完了の他動詞の動作主が 3 人称単数で、明示的な被動者名詞句が存在しない場合に限って、被動者が 3 人称単数の場合には動作主と被動者のどちらかのみが標示され、どちらが標示されているのか判断できない曖昧性のある標示が、被動者が 3 人称複数の場合には、被動者のみが標示され、動作主は標示されないという変則的な標示を見せる。以下の例文は、(6) a. が動作主が 3SG で、被動者が 3SG である例文、b. が動作主が 3SG で、被動者が 3PL である例文である。

- (6) a. ka:mi bag-id-o:s? *bag-id-o:s-is
 who break-PRF-**3SG.A/P**
 ‘Who broke it?’
- b. lah-d-o:san. *lah-d-o:s-san.
 see-PRF-**3PL.P**
 ‘He saw them.’

このような変則的な一致標示は、先行研究においては確認できない。Macalister (1914) によるドマリ語エルサレム方言の記述を見ると、動作主が 3SG、被動者が 3SG あるいは 3PL であり、明示的な被動者名詞句が存在しない完了の他動詞節について、以下のような例が確認できた。

- (7) a. nan-d-o:s-san.
 bring-PRF-**3SG.A-3PL.P**
 ‘He brought them.’ (Macalister 1914: 29)
- b. man-d-os-s-i?.
 leave-PRF-**3SG.A-3SG.P-NEG**
 ‘She did not leave him.’ (Macalister 1914: 29)

また、Matras (2012) による同方言の記述を見ると、動作主と被動者がともに 3SG であり、明示的な被動者名詞句が存在しない完了の他動詞節について、以下のような例が確認できた。

- (8) a. lah-d-o:s-is.
 see-PRF-**3SG.A-3SG.P**
 ‘S/he saw he/him.’ (Matras 2012: 82)

これらの例においては、動作主と被動者が規則通りに標示されている。従って、本研究で記述したような変則的な一致標示は、ドマリ語エルサレム方言内でも一部のコミュニテ

ィのみにおいて生じた改新であると推定できる。

例文 (6) のような変則的な一致標示の成立については、第 5 節において考察する。

4. 形式的な二重斜格構文が成立した背景

4. 1. インド・アーリア語のアラインメントの歴史的変化

本節では、例文 (2) b. c. や (4) c. に見られるような形式的な二重斜格型の一致標示が生じた背景を考察する。そのため、ドマリ語が系統的に属するインド・アーリア語と、インド亜大陸を出た後に接触したと考えられるイラン諸語において生じた一致標示の歴史的変化をふまえ、ドマリ語が共有している改新を探す。

Bubenik (2000) より、インド・アーリア語の過去時制の一致標示に生じた変化は以下のようなものである。

1. Old Indo-Aryan では、無標の過去時制動詞はアオリストであったが、有標な過去時制動詞として、過去分詞を用いた受動構文が存在した。
2. Old Indo-Aryan から Middle Indo-Aryan にかけて、有標な過去時制動詞であった過去分詞受動構文の使用頻度が高くなり、無標の過去時制動詞として用いられるように変化した。過去分詞は、名詞や形容詞の曲用と同じく、性と数による一致パターンを取り、他動詞節においては被動者との一致を見せた。
3. Middle Indo-Aryan 後期にはアオリストによる過去時制が用いられなくなった。
4. 過去分詞受動構文においては、初期には動作主は必須項とされなかったが、無標の過去時制構文としてパラダイムに組み込まれるにつれ、動作主名詞句が主語として、被動者名詞句が目的語として再解釈されるようになり、能格型の格標示が生じた。
5. 多くの New Indo-Aryan では、過去時制の他動詞において、被動者との一致標示が行われる能格型の一致標示が見られる。

ドマリ語の一致標示は、3SG の一致標識 -a/-i と 3PL の一致標識 -e において名詞や形容詞の性と数による一致と同形式の標識が用いられていることや、語幹の形式が Old–Middle Indo-Aryan の過去分詞の形式に類似していることから、1–3. の変化を共有していることが分かる。ただし、ドマリ語の過去分詞由来の語幹は、他動詞節において被動者ではなく動作主との一致を示すため、ドマリ語では後に対格型への変化が生じたと推定できる。

4. については、ドマリ語には能格の格標示は存在しないため、この変化は共有していないか、失ったと考えられる。また 5. について、ドマリ語は完了相の動詞においてもほとんどの場合は自動詞の唯一項と他動詞の動作主が主語となり一致を引き起こす対格型アライメントの一致体系に変化しているため、この改新も共有していない。

また、形式的な二重斜格型の一致標示に見られる *pronominal suffix* 型の一致標識の起源であり、被動者の標示にも用いられる斜格人称代名詞接辞については、Matras (2012) により、Middle Indo-Aryan の斜格人称代名詞の接語形が起源であると推定されている。

表2: ドマリ語 斜格人称代名詞接辞

	SG.	PL.
1	-(o/i/e)m	-man
2	-(o/i/e)r	-ran
3	-(o/i/e)s	-san

表5: MIA (Ardhamāgadhī など) 斜格代名詞 接語形
(Pischel 1957: 296-303, §415-423)

	SG.	PL.
1	me	ṇe
2	te	bhe
3	se	se

表6: サンスクリット 属格/与格代名詞 接語形

	SG.	PL.
1	me	nas
2	te	vas
3	—	—

まず形式について考察する。Middle Indo-Aryan の斜格代名詞の接語形は、表 5 のようである。同様の斜格代名詞の接語形は、一人称と二人称の属格と与格の代名詞の接語形として、Old Indo-Aryan 期にも存在した (表 6)。

表 2 (再掲) に挙げたドマリ語の人称代名詞接辞と比較すると、Middle Indo-Aryan の斜格代名詞接語形の単数形は、子音がドマリ語の人称代名詞接辞とおよそ一致しており、語末の母音の消失と、 $t > r$ の二つの音韻変化が証明されれば、ドマリ語の人称代名詞接辞の単数形が Middle Indo-Aryan の斜格人称代名詞の接語形に由来することを示すことができる。

このうち語末の母音の消失について、多くの New Indo-Aryan 言語では語末の母音が消失している (Masica 1991: 188) が、この変化はドマリ語にも見られる。

MIA jibbhā > jibh (Hindi), jib (Bengali), jibh (Marathi), ḍib (Domari) ‘tongue’

MIA rattī > rāt (Hindi), rāt (Bengali), rāt (Marathi), arāt (Domari) ‘night’

$t > r$ については、Turner (1926) により、ドマリ語には $t, d > r/V_V$ の音変化が生じたことが指摘されている。

Skt. āgataḥ > Pa. āgata- > e:ra ‘came’

Skt. gataḥ > Pa. gata- > gara ‘went’

従って、単数形の形式については、ドマリ語の人称代名詞接辞は Middle Indo-Aryan の斜格人称代名詞の接語形に由来しており、西イラン諸語と接触する以前から起源になる形式を持っていた可能性が高い。

一方複数形については、子音の一致も見られないため、ドマリ語の人称代名詞接辞の複数形が Middle Indo-Aryan の斜格人称代名詞の接語形に由来していると考えすることはできない。

また、Bubeník (1996: 166–179) や Bubeník and Paranjape (1996) によると、Old Indo-Aryan 及び Middle Indo-Aryan には、斜格人称代名詞の接語形によって、他動詞の被動者を標示する用法や、他動詞が過去分詞形の場合に動作主を標示する用法も存在した。これらの例は以下の (9) のようである。a. は Old Indo-Aryan の斜格人称代名詞について所有あるいは動作主のどちらの解釈も可能である例、b. は Middle Indo-Aryan のうち Ardha-Māgadhī の斜格人称代名詞が被動者を表す例、c. は同言語において動作主を表す例である。

- (9) a. tatām me āpas tād u tāyate púnah.
 done my/by me work it and is-done again
 ‘My work is done and it is being done again.’
 あるいは ‘(my) work is done by me and it is being done again’
 (Bubeník 1996: 169) [RV i.110.1]
- b. suṇeha=me.
 hear.PL=1SG.OBL
 ‘hear me!’ (Bubeník and Paranjape 1996: 112) [Mokkhamagge 4.6]
- c. suṇā me āusā tena bhagavaṃṇā evaṃ akkhāṇā.
 heard I+GEN longlived that+INSTR lord+INSTR thus spoken+NEUTER
 ‘I heard, long-lived one, that the Lord had spoken thus.’
 (Bubeník 1996: 174) [Āṇṇ S, 1, 1, 1]

しかし、動詞句の構造において、ドマリ語とこれらのインド・アーリア語には差異がある。Middle Indo-Aryan においては現在のドマリ語のような動作主と被動者の標示を連ねる構造を取ることは無かったと考えられる。また、現在のドマリ語の人称代名詞接辞のような主要部接続型ではなく、Wackernagel の法則に従って節の頭から二番目に接語が置かれている。

以上から、ドマリ語はインド・アーリア語圏に暮らしていた時期にも接辞あるいは接語によって動作主や被動者を標示する構文を用いていた可能性がある。ただし、ドマリ語の斜格人称代名詞接辞は、単数形の形式については Middle Indo-Aryan の人称代名詞の斜格形に起源を持つと考えられるものの、複数形の人称代名詞接辞の形式が異なることや、動作主標示に被動者標示を連ねる構造の有無などの差異も見られる。Middle Indo-Aryan には見られないこれらの特徴の成立については、次項における西イラン諸語との言語接触を通じて考察する。

4. 2. イラン諸語のアラインメントの歴史的変化

Haig (2018) によれば、イラン語群に生じた代名詞を起源とする一致標識の成立と歴史的変化は以下のようなものである。

1. Old Iranian 期には、Wackernagel の法則により文頭の語の後に現れる代名詞の接語形が存在した。
2. Middle Iranian 期には対格と斜格 (属格/与格) の代名詞接語が一つのパラダイムに

統合した (表 7)。

3. この統合に引き続いて、斜格の代名詞の接語形は、直接目的語の代名詞や、限られた条件下での主語の代名詞として用いられるようになった。
4. 目的語としての用法について、
 - (a) Old Iranian 期と Middle Iranian 期には、明示的な目的語名詞句が存在しない場合のみ代名詞接語が現れた。
 - (b) 同じような目的語としての代名詞の接語形は、中期西イラン諸語に見られ、現在でも西イラン諸語で多く見られる。
 - (c) また、Old-Middle Iranian 期には、他動詞において、コピュラを伴う過去分詞が通常の動詞の一致標識によって被動者と一致する能格構文も存在したが、イラン語群のほとんどの言語ではこの構文が消失した。Central Kurdish など一部の言語では残存しているものの、明示的な被動者名詞句が存在しない場合にのみ用いられる義務性の低い標示となっている。
5. 動作主としての用法について、
 - (a) Old-Middle Iranian 期では、過去時制において、明示的な動作主名詞句が存在しない場合のみ代名詞接語が用いられた。
 - (b) New Iranian においては、ペルシア語など一部の西イラン諸語においては代名詞接語の動作主としての用法は消失しているが、その他の言語においては保持されており、過去時制においては義務的な一致標識に文法化している言語もある。
6. Middle Iranian においては、代名詞接語はほとんどの場合 Wackernagel の法則に従って文頭から二番目の位置に置かれたが、New Iranian においては動詞などの主要部に後続する言語や、動詞句の二番目の位置に現れる言語もある。

北村 (2023) により、ドマリ語の人称代名詞接辞は、西イラン諸語との言語接触を通じて借用によって成立したことを示した。ドマリ語の人称代名詞接辞 (表 2) は、表 7 に挙げた Middle Iranian の代名詞の接語形に形式が類似しているが、単数形の人称代名詞接辞 -m, -r, -s については、前項で述べた通り、表 5 に挙げた Middle Indo-Aryan の人称代名詞の斜格形に由来する可能性が高い。従ってドマリ語は、西イラン諸語との言語接触を通じて、複数接辞 -an を借用し、それを用いた複数形の形式 -man, -ran, -san を成立させたと推定することができる。

表7: 中期イラン語 人称代名詞接辞

	Middle Persian	Parthian
1SG	-(u)m	
2SG	-(u)t, -(u)d	
3SG	-(i)š	
1PL	-n (rare), -mān	-mān
2PL	-(i)tān, -(i)dān	-tān
3PL	-(i)šān	

表2: ドマリ語 斜格人称代名詞接辞

1SG	-(o/i/e)m
2SG	-(o/i/e)r
3SG	-(o/i/e)s
1PL	-man
2PL	-ran
3PL	-san

3-5. に記述したような、西イラン諸語に見られる目的語としての機能や、動作主としての機能については、これらの機能は Middle Indo-Aryan にも見られるため、ドマリ語は西イラン諸語との言語接触以前からこの機能を持っていた可能性が高い。しかし、Middle Indo-Aryan においては、現在のドマリ語に見られるような、動作主標示に被動者標示を連ねる構造は見られないのに対し、西イラン諸語においては、このような標示が可能である言語が見られる。

- (10) a. bor-**šen-im** marizxuna.
take.PST=**3PL:A-1PL:O** hospital
'They took us to the hospital.' (Behbahani, Mohammadirad 2020: 293)
- b. be-kōšt=**em=iš**.
PUNCT-kill.PST=**1SG:A=3SG:O**
'I killed him.' (Chali, Mohammadirad 2020: 293)
- c. wa-**m=ad-a** dayšt.
take.PRS-**1SG:A=3PL:O-DRC** outside
'I will take you out.' (Bijar Southern Kurdish, Mohammadirad 2020: 364)
- d. na-nāsī-**m=ayān**.
NEG-know.PST-**1SG:A=3PL:O**
'I didn't know them.' (Bijar Southern Kurdish, Mohammadirad 2020: 364)

従って、このように接辞や接語を連ねる構造は、西イラン諸語からの人称代名詞接辞の一部の借用に伴って、pattern replication が生じたものである可能性がある。

pattern replication とは、上層言語の構造をモデルにして、基層言語の本来の構造を再解釈することであり (Matras 2020)、語レベルの場合はカルクや翻訳借用、句や節レベルの場合は metatypy, structural borrowing, grammatical borrowing, syntactic restructuring などとも呼ばれる。

6. については、ドマリ語には Wackernagel の法則は見られず、動詞などの主要部に接続するため、主要部接続の言語から借用したか、ドマリ語において主要部接続に変化したと考えられる。

4. 3. 二重斜格標示が生じた背景

以上を踏まえ、形式的な二重斜格標示が生じた背景について、本稿で立てる仮説は以下の通りである。

1. ドマリ語は、Middle Indo-Aryan (600BC–1000AD) において過去分詞の受動構文が無標の過去時制動詞として用いられ始めるまではインド・アーリア語圏に存在した。
2. その後 New Iranian 期 (7c. AD 以降) に西イラン諸語が話されている地域に移動し、これらの言語との言語接触の結果、人称代名詞接辞の複数形の形式を借用し、動作主標示に被動者標示を連ねる構造も得た。

この仮説は、2.2 に挙げた Turner (1926) による音変化の考察の結果と矛盾しない。

また、Haig (2008) は、二重斜格型のアラインメントは、能格型から対格型への変化の過渡期で見られる構造であると分析している。これに基づいてドマリ語に見られる形式的な二重斜格構文を分析すると以下のような通時的变化を推定することができる。

1. インド・アーリア語圏を出る頃には、Middle Indo-Aryan に見られるように、完了の他動詞においては、過去分詞と同形式の語幹を、名詞や形容詞と同じように性と数によって被動者と一致させるという能格型の構文を用いていた。動作主が単数である完了相の動詞においては、人称代名詞の斜格形によって動作主を標示する構文も見られた。
2. 西イラン諸語との言語接触の中で、複数形の人称代名詞接辞を借用し、現在の人称代名詞接辞の体系が成立した。また、西イラン諸語の pattern replication によって、単数形においても複数形においても被動者の標示が人称代名詞接辞で行われるよう

になった。

3. その後、対格型アラインメントへの変化が始まり、完了相における、1SG、2SG、3SG の動作主の人称代名詞接辞による標示は無標の動詞の一致標識として解釈されるようになった。ただし、1SG、2SG については、完了相においては常に人称代名詞接辞を主語 (自動詞の唯一項と他動詞の動作主) との一致標識として用いるようになったが、3SG については、明示的な被動者名詞句が存在しない場合の他動詞の動作主との一致標識としてのみ用いられるようになった。また、被動者を表す人称代名詞接辞は、脱文法化し、一致の義務性が低くなった。
4. その結果、他動詞の被動者名詞句が存在せず、被動者が人称代名詞接辞によって標示される場合に、動作主も被動者も斜格代名詞に由来する形式で一致標示されるという形式的な二重斜格型のアラインメントが生じた。この構造は現在でも、例文 (2) b. c. や (4) c. のような 1SG、2SG、3SG が動作主で、明示的な被動者名詞句が存在しない他動詞節に残っている。

Haig (2018) では、主語を表す代名詞の一致標識への文法化が生じやすいのに対し、目的語を表す代名詞は義務的な一致標識になりにくいことが指摘されている。本稿で分析したドマリ語でも、動作主を主語として表す人称代名詞接辞は、文法化が進み、完了相の動詞の一致標識 *pronominal suffix* 型としてパラダイムに組み込まれているのに対し、被動者を表す人称代名詞接辞は、一度被動者との一致標識として取り入れられたが、脱文法化し一致の義務性が低くなるという、同様の傾向を観察することができる。

5. 変則的な構文が生じた背景

本節では、完了の他動詞において、動作主が 3 人称単数で、明示的な被動者名詞句が存在しない場合、被動者が 3 人称単数である際に見られる曖昧性のある構文や、被動者が 3 人称複数である際に見られる変則的な構文が生じた背景を考察する。本項ではまず、音韻面から考察する。

ドマリ語においては、3 人称単数の動作主標示 *-(o)s* に、3 人称単数 *-(i)s* あるいは 3 人称複数 *-san* の被動者標示が接続する場合、*-VsVs-* あるいは *-ss-* という音韻環境が生じる。ここに、単子音化や重音脱落などの語中音消失による一致標示の摩耗が生じ、変則的な一致が生じたと推定できる。

e.g. *-os-is* > *-os-s* > *-os*

-os-san > -osan

ただし、ドマリ語において -VsVs- あるいは -ss- の重音脱落や単子音化が生じているのはこの構文においてのみである。従って、音韻環境のみによる説明は不十分である。

ここで、(6)に見られるような変則的な一致標示について、被動者が 3SG の場合と 3PL の場合をともに、動作主がゼロ標示であり、被動者のみの標示が残っていると仮定すると、ドマリ語が接触しているアラビア語の構文をモデルにした部分的な *pattern replication* が生じた結果であると推定することができる。ドマリ語エルサレム方言の話者はアラビア語とのバイリンガルであり、ドマリ語エルサレム方言にはアラビア語をモデルとした *pattern replication* が多く見られる。

以下の例 (11) は、アラビア語をモデルとした *pattern replication* によりドマリ語の名詞修飾の語順が変化した例である。ドマリ語エルサレム方言では従来、a. のような名詞後置型の名詞修飾が見られたが、現在では、b. のような名詞前置型の名詞修飾も用いられる。c. はアラビア語エルサレム方言の例であり、ドマリ語の例 b. のような名詞前置型の名詞修飾は、c. のようなアラビア語の名詞前置型の名詞修飾の *pattern replication* であると推定できる。その他の例については、Matras (2020) を参照されたい。

- (11) a. e:r-a **till-a** **kaṣ-a.**
 come-PRF-3SG.M **old-SG.M non-Dom man-SG.M**
 ‘An old man came.’
- b. e:r-a **kaṣ-a** **till-a.**
 come-PRF-3SG.M **non-Dom man-SG.M old-SG.M**
 ‘An old man came.’
- c. ʔaṣa: **zalame kbi:r.**
 come.PRF.3SG.M **man** **old.M**
 ‘An old man came.’

以下の例文 (12) は、例文 (6) a. b. を、動作主がゼロ標示であり、被動者のみの標示が残っていると仮定したものである。

- (12) a. ka:ni bag-id-**ø-os**?
 who break-PRF-**3SG.A-3SG.P**
 ‘Who broke it?’
- b. lah-d-**ø-o:san.**
 see-PRF-**3SG.A-3PL.P**

‘He saw them.’

明示的な被動者名詞句が存在しない他動詞節においては、人称代名詞接辞を用いた被動者標示が義務的であるため、(12) の例において被動者が標示されていることは規則通りである。一方、動作主については、上記のような限定的な場合を除いて、ドマリ語の動詞は義務的に動作主と一致するため、(12) のように動作主がゼロ標示になることは変則的である。

ドマリ語が接触しているアラビア語においては、完了相の動詞の動作主が 3SG の場合、ゼロ標示になる。次の例文は、アラビア語の完了相の動詞の動作主が 3SG の場合の例である。

- (13) d^ʕarab-Ø-ni.
hit.PRF-3SG.A-1SG.P
‘He hit me.’ (Elihay 2012: 113)

このように、完了相の動詞において 3SG 主語がゼロ標示になるという点において (12) と (13) は構造が類似しており、ドマリ語の (12) のような構文は、アラビア語の (13) のような構文をモデルとした *pattern replication* である可能性が高い。

ただし、アラビア語においては、完了相の動詞の 3SG の動作主は常にゼロ標示である一方で、ドマリ語の場合、3SG/PL の被動者 -s/-san が接続する場合のみ、3SG の動作主がゼロ標示になるという違いも存在する。

また、ドマリ語がアラビア語より先に接触した西イラン諸語においても過去時制における 3SG の動作主のゼロ標示が見られるが、この標示パターンは Macalister (1914) や Matras (2012) などの先行研究におけるドマリ語エルサレム方言には見られないため、ドマリ語が西イラン諸語との言語接触を通じて 3SG 動作主のゼロ標示の構造を得た可能性は低い。

6. 結論

本研究では、ドマリ語エルサレム方言の動詞の一致標示におけるアラインメントパターンを明示し、どのような歴史的背景によって複雑な一致体系が成立したのかという問いを明らかにすることを目的とした。この問いを明らかにするため、インド・アーリア語群とイラン語群について、一致標示におけるアラインメントの歴史的変化を説明し、ドマリ語がどの変化を共有しているのか考察した。結論として、ドマリ語は Middle Indo-Aryan 期

(600BC–1000AD) にインド・アーリア語群において過去分詞の受動構文が過去時制動詞として用いられ始めるまではインド・アーリア語圏に居住していたことと、New Iranian 期 (7c.AD–) には西イラン諸語が話されている地域に移住し、借用により、人称代名詞接辞の複数形の形式や、接辞を連ねる構造を得たことにより、現在のドマリ語の複雑な一致体系を成立させたことを主張した。また、ドマリ語の完了相の動詞において、Middle Indo-Aryan 期の能格型の一致体系から対格型への変化が生じ、その過渡期において二重斜格型アラインメントが生じたという歴史的変化も推定した。

また、完了相の他動詞において動作主が 3 人称単数、被動者が 3 人称単数あるいは 3 人称複数で、明示的な被動者名詞句が存在しない場合に生じる変則的な一致標示は、語中音消失が生じ得る環境であったという音韻的な側面に加え、アラビア語をモデルとした pattern replication が生じたことにより成立したという分析を行った。

参考文献

- Bubenik, Vít (2000) Was Proto-Romani an ergative language?. In: Elšík, Viktor and Yaron Matras (eds.) *Grammatical Relations in Romani: The Noun Phrase*, 205–227. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Du Bois, John W. (1987) The discourse basis of ergativity. *Language* 63 (4): 805–855.
- Emanau, Murray B. (1965) India and a Linguistic Areas. In: *Language and Linguistic Areas: Essays*. 1980, 126-166. Stanford: Stanford University Press.
- Haig, Geoffrey (2008) *Alignment Change in Iranian Languages: A Construction Grammar Approach*. Berlin, New York: De Gruyter Mouton.
- Haig, Geoffrey (2018) The grammaticalization of object pronouns: Why differential object indexing is an attractor state. *Linguistics* 56 (4): 781–818.
- Herin, Bruno (2012) The Domari language of Aleppo (Syria). *Linguistic Discovery* 10 (2): 1–52.
- Herin, Bruno (2014) The northern dialects of Domari. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 164: 407-450.
- Herin, Bruno (2020) Northern Domari. In: Lucas, Christopher, Stefano Manfredi (eds.) *Arabic and Contact-induced Change*, 489-509. Berlin: Language Science Press.
- Korn, Agnes (2016) A partial tree of Central Iranian. *Indogermanische Forschungen* 121 (1): 401–434.
- Macalister, Robert Alexander Stewart (1914) *The language of the Nawar or Zutt: The nomad smiths of Palestine*. Gypsy Lore Society Monographs 3. London: Edinburgh University Press.
- Matras, Yaron (2001) Tense, aspect and modality categories in Romani. *STUF - Language Typology and Universals* 54 (2): 162-180.
- Matras, Yaron (2004) *Romani: A Linguistic Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Matras, Yaron (2012) *A grammar of Domari*. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Matras, Yaron (2020) Jerusalem Domari. In: Lucas, Christopher, Stefano Manfredi (eds.) *Arabic and Contact-induced Change*, 511-531. Berlin: Language Science Press.
- Masica, Colin P. (1991) *The Indo-Aryan Languages*. Cambridge: Cambridge University

Press.

Pischel, Richard (1957) *Comparative Grammar of the Prākṛit Languages. Translated from the german by Subhadra Jhā*. Varanasi: Shri Sundarlal Jain.

Turner, Ralph (1926) The position of Romani in Indo-Aryan. *Journal of the Gypsy Lore Society* 3 (5): 145-189.

Turner, Ralph (1927) The phonetic weakness of terminational elements in Indo-Aryan. *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland* 2: 227-239.

Watkins, Calvert (1962) *Indo-European origins of the Celtic verb. 1. The sigmatic aorist*. Dublin: Institute for Advanced Studies.

On the Diachronic Development of the Indexing System in Jerusalem Domari

KITAMURA Moe

kitamuramoe0506@gmail.com

Keywords: Domari, Indo-European, Indo-Aryan, descriptive linguistics, indexing

Abstract

This study aims to describe the indexing patterns of the Domari language and consider what historical background led to the establishment of such a complicated indexing system. In this study, I describe the chronological changes of indexing patterns in Indo-Aryan and Iranian languages and discuss which innovations are shared with Domari.

In conclusion, I argued that Domari speakers had stayed in Indo-Aryan language-speaking areas until the Middle Indo-Aryan period (600BC–1000AD) when the Indo-Aryan group began to use the past participle passive constructions as past tense verbs and that they migrated to the West Iranian speaking area during the New Iranian period (7c.AD–). During this period, the plural forms of the pronominal suffixes and the structure of linking the Patient indexing to the Agent indexing became established, thus forming the complex indexing system of present Domari. In addition, as for chronological changes in Domari perfect verbs, I assume that the double oblique indexing system in Domari occurred during the period when the ergative-absolutive case agreement system of the Middle Indo-Aryan period changed to the nominative-accusative agreement system. Moreover, it is argued that the irregular agreement patterns that occur in the perfect transitive verbs with third person singular agents together with third person singular or plural patients that are not realized as explicit noun phrases, was caused not only by the phonological factor that the environment was prone to syncope but also by pattern replication modeled on Arabic.

(きたむら・もえ 東京大学人文社会系研究科言語学専門分野博士一年)